岡山県古代吉備文化財センター

所報吉備

70

March 2021

Okayama Prefectural Ancient Kibi Cultural Properties Center

第70号　令和3年3月〈年2回 3月・9月発行〉

巨大な横穴式石室をもつ吉備の大首長墓

「吉備路の歴史遺産」魅力発信事業

総社市上林ほか

古代吉備文化財センターでは、こうもり塚古墳や備中国分寺跡、備中国分尼寺跡などの吉備路の歴史遺産について調査研究を進めてその価値を明らかにし、地域の文化資源として活用を図るための事業を令和２年度から行っています。

今年度は、総社市上林に所在する墳長約100mの前方後円墳で県内最大の横穴式石室を持つこうもり塚古墳（国指定史跡）の保存活用総合調査に取り組んでいます。墳丘の航空レーザー測量や横穴式石室の三次元計測による現況の記録のほか、こうもり塚古墳がつくられた時代の背景を紹介する講座や吉備路の遺跡を巡る歴史ウォーキングといったイベントを行いました。

令和３年度以降は墳丘の発掘調査のほか、これまでの調査成果をまとめるとともに、周辺の古墳についても研究を進めていきます。こうした成果は随時紹介し、吉備路の魅力を広く知っていただけるよう情報を発信していきたいと思います。

（四田寛人）



空から見たこうもり塚古墳（南西上空から）

こうもり塚古墳の測量調査

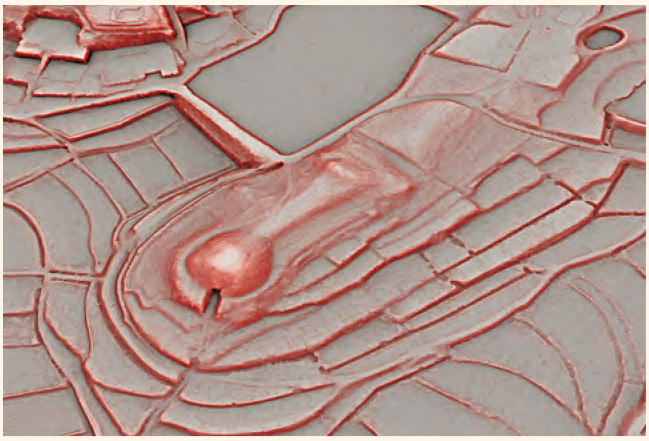
こうもり塚古墳保存活用総合調査として、古墳の現状を記録するため、墳丘の航空レーザー測量と横穴式石室内の三次元計測を実施しました。

航空レーザー測量とは、航空機に搭載したレーザースキャナ（レーザー光を照射し、反射して戻ってくるまでの時間を計ることで距離を計測する装置）を用いて地上の標高や地形を図示することです。右上の図は航空レーザー測量で作成した赤色立体地図で、地形を人の目で判別しやすい赤色で立体的に表現しています。細かな地形の凹凸を判読することが可能で、古墳や山城といった大規模な遺跡・遺構の形を把握する上で大きな力を発揮します。こうもり塚古墳を赤色立体地図でみると、二段につくられた前方後円形の墳丘は丘陵の先端を整形して築造されており、その周辺には幅20～30m前後の段が巡っている様子が分かります。

横穴式石室の三次元計測は３Ｄレーザースキャナによって実施しました。これは非常に精密な計測が可能であり、これまでにない精度で石室の形状を記録することができました。

今回の測量調査によって得られた情報は、今後の調査で活用していきたいと考えています。

（四田寛人）



墳丘の赤色立体地図



横穴式石室の三次元計測の様子

吉備路ウォーク

12月５日（土曜日）に吉備路ウォークを開催しました。このイベントは、吉備路の史跡を調査員の解説を聞きながら巡るというもので、第１回目となるこのたびは、こうもり塚古墳、備中国分寺跡、備中国分尼寺跡などを訪ねました。

35名の参加者は、新型コロナウイルス感染対策を行った上で２班に分かれて見学を行いました。特にこうもり塚古墳では、普段は立ち入ることのできない県内最大の横穴式石室を公開し、巨大な石室の石材や家形石棺を間近でご覧いただきました。

当日は天候に恵まれ、ウォーキングには絶好の一日となりました。参加されたみなさんは約２時間の見学の間、こうもり塚古墳の石室や備中国分寺・国分尼寺跡に残る礎石や築地の様子に感嘆され、地域の歴史のロマンに思いをはせているようでした。

（四田寛人）





吉備路ウォークの様子

吉備の考古学講座「こうもり塚古墳の時代」

県立図書館多目的ホールにおいて、「こうもり塚古墳の時代」と題する全３回の講座を開催しました。講義では、こうもり塚古墳に関する知識や理解を深めるため、この古墳がつくられた６世紀の社会のあり方について説明し、あわせて同時期の県内主要遺跡について解説しました。

第１回　９月19日（土曜日）

講義「６世紀の吉備と古墳」　　総括副参事　尾上　元規

こうもり塚古墳築造の背景には、大和政権による直轄地である屯倉の設置や東アジアの動乱が想定されます。吉備の首長は独自性を保ちつつ、大和政権との関わりを深めていったと思われます。

遺跡紹介「西山古墳群ほか」　　主　　幹　和田　　剛

西山古墳群や富原西奥古墳など、岡山市北区の津高地域に所在する古墳時代後期の古墳の特徴や築造の背景について紹介しました。



第１回講座の様子

第２回　11月21日（土曜日）

講義「６世紀の変革」　　参　　事　亀山　行雄

古代国家の成立前夜にあたる６世紀には、新たな王統の誕生や朝鮮半島情勢の緊迫化、地方支配の伸展など多くの社会的な変革がありました。一般の人々の生活様式や思想にも大きな変化が認められます。

遺跡紹介「津寺遺跡ほか」　　主　　幹　團　　奈歩

多数の住居が営まれた６世紀の津寺遺跡では、農具を主体とする鉄器の製作や護岸施設が作られるなど、地域の拠点集落として機能していたと考えられます。



第２回講座の様子

第３回　２月27日（土曜日）

講義「６世紀の生産」　　主　　幹　米田　克彦

古墳時代の吉備では製塩・製鉄・鍛冶、窯業などの手工業生産が活発に行われました。５、６世紀に生産体制が段階的に整備されたことで、王権や地域社会を支える基盤となりました。

遺跡紹介「窪木薬師遺跡ほか」　　副　参　事　岡本　泰典

窪木薬師遺跡は総社市窪木ほかにある、各種武器などを製作していた鍛冶専業の集落遺跡です。鉄器の製作は５世紀に始まり、６世紀後半に最盛期を迎えます。

パンフレット『吉備路の歴史遺産』

吉備路周辺の文化財を見学する際に役立てていただくため、パンフレット『吉備路の歴史遺産　こうもり塚古墳とその周辺』を刊行しました。本書では、県内最大の横穴式石室をもつこうもり塚古墳のほか、造山古墳や作山古墳、備中国分寺跡・国分尼寺跡などの見どころや地域の歴史について学べるガイダンス施設の情報を掲載しています。総社市・岡山市の文化財関連施設、主要な観光施設などで配布しているほか、当センターホームページ上でも閲覧できます。このパンフレットを片手に吉備路の遺跡を訪ねてみてはいかがでしょうか。

（四田寛人）



「吉備路の歴史遺産」

勝負峪遺跡・高尾北ヤシキ古墳・高尾北ヤシキ遺跡

津山市平福・高尾

一般国道53号（津山南道路）改築工事に伴う今年度の発掘調査は、上半期に所報第69号で紹介した桑山５号墳、勝負峪遺跡、下半期に高尾北ヤシキ古墳・高尾北ヤシキ遺跡の調査を行いました。

勝負峪遺跡では、弥生時代中期（約２,000年前）の集落や集団墓地を確認しました。このうち墓地は、尾根上の平坦地に造られており、その北側には墓域を区切る石列が約10mにわたり残っていました。墓穴は長方形をしており、長さが約２ｍの大型墓11基と約１ｍの小型墓９基の合計20基見つかりました。墓穴のつくりから、両端に短い板を立てて、これを挟みこむように２枚の長い板を渡した組合せ式の木棺が使用されたと思われます。また、小型墓は棺内の長さが約40㎝しかないことから、埋葬されたのは子どもであったと想定されます。（氏平昭則）



勝負峪遺跡の集団墓地（北東から）



勝負峪遺跡の木棺墓（南から）

高尾北ヤシキ古墳は６世紀末に作られた直径約13mの円墳で、南東方向に開口する無袖式の横穴式石室を確認しました。横穴式石室の規模は残存長約6.5m、最大幅約1.7ｍで、奥壁には高さ約1.7m、幅約1.3mの大きな石材を使用していました。石室の床面からは、陶棺、筒形土製品や須恵器、土師器、馬具片などが見つかりました。このうち須恵器は、石室の南西隅から杯や壺、提瓶などが重なり合って出土し、追葬時に集められたと考えられます。陶棺からは鏃や鞘尻といった刀装具や刀子、ガラス小玉が出土しました。

高尾北ヤシキ遺跡では段状遺構や土坑、柱穴等が見つかり、弥生土器、須恵器、土師器、勝間田焼や鉄滓が出土したことから、弥生時代から中世にかけての集落と考えられます。（藤井雅大）



高尾北ヤシキ古墳の石室（南東から）



高尾北ヤシキ古墳の遺物出土状況（南から）

津島遺跡

岡山市北区いずみ町

津島遺跡は、岡山県総合グラウンドとその周辺に広がる、弥生時代を中心とする集落遺跡で、一部は国の史跡に指定され、「津島やよい広場」として整備されています。今回の調査は、岡山武道館練習道場の建替工事に伴い、令和２年９月から11月まで実施しました。

調査地はグラウンドの北西隅に位置し、以前から遺跡の縁辺部に相当すると考えられていた場所です。今回の調査でも、見つかった遺構は古墳時代前期の溝１条にとどまりました。堆積した土の観察結果から、調査地周辺は弥生時代後期まで低湿地の環境にあり、土砂の堆積が進んだ古墳時代前期になって地形が安定したものの、集落は営まれなかったようです。

なお、調査区内から焼夷弾（火災を発生させる爆弾）の残骸が見つかり、調査の結果、昭和20（1945）年６月29日の岡山空襲時に投下された米軍のM47焼夷弾と判明しました。総合グラウンドのある場所は、戦前・戦中には練兵場（軍隊の訓練場）でしたが、空襲の目標は一般市民の住む市街地であり、本地点への着弾は偶然と考えられます。（岡本泰典）



古墳時代前期の溝（西から）



出土した焼夷弾

岡山城跡

岡山市北区丸の内

旭川内山下地区河川改修工事に伴い、岡山城跡の調査を実施しました。調査の結果、旭川沿いに残る岡山城跡の門や櫓などの石垣の様子が明らかとなりました。

中水手門は本丸の東南にある城門です。今回、枡形を形作る石垣が見つかりました。石垣の高さは最大３ｍを測ります。隅角部には最大長２ｍを測る石が用いられているほか、築石には最大長1.5m、最大幅1.8mを測る大きな石が用いられています。横から見ると反りが見られ、全て自然石で築かれています。こうした特徴は17世紀初頭に池田氏により築かれた本丸にある石垣の特徴とよく似ています。これら石垣は砂層の上に築かれていました。また、この石垣に併せて城内から河川敷へ降りるための石段（雁木）も見つかりました。

その他にも、本丸南東隅にある弓櫓や下水手門など３か所で調査を行いました。検出された石垣は中水手門の特徴とよく似ており、同じ頃に築かれたものと思われます。池田氏による普請の実態を知る上で、貴重な成果となりました。（和田　剛）



中水手門の石垣（北東から）



見つかった雁木（南東から）

講演会『鉄生産の始まりと展開』

12月12日（土曜日）、岡山県立美術館ホールを会場に村上恭通先生（愛媛大学アジア古代産業考古学研究センター）、角田徳幸先生（島根県埋蔵文化財調査センター）による講演会『鉄生産の始まりと展開』を開催しました。

村上先生は、日本列島における古墳時代～古代にかけての鉄生産が、世界史的にも希有な継続性を持っていると評価された上で、豊富な実験の成果から古墳時代の製鉄炉と製鉄技術を復元されました。そして、７世紀に始まった畿内近郊での鉄生産がその後断絶する一方、６世紀に始まった中国地方の鉄生産は中世以降にまで続き、近世のたたら製鉄として結実すると結論されました。

角田先生は、発掘事例をもとに古代末～近世にかけての鉄生産について論じられました。まず、古代の鉄生産が吉備など山陽地域で盛んであったのに対し、中世に入ると生産の中心は山陰地方に移ると指摘されました。そして、中世後半には大型の製鉄炉が出現し、その地下構造には近世の製鉄炉につながる防湿施設が存在していたとして、石材や粘土を使ってその機能を高めたものが近世のたたら製鉄であると評価されました。（和田　剛）



村上先生の講演



角田先生の講演

再発見！ふるさとの山城－中世城館跡報告会－

１月23日（土曜日）、平成25年から令和元年度までの７か年にわたって実施してきた『岡山県中世城館跡総合調査事業』の報告会をさん太ホールにて行いました。専門委員として調査をご指導いただいた岡山大学名誉教授の稲田孝司先生には趣旨説明として「岡山県中世城館跡総合調査のあらましと意義」を、同じく滋賀県立大学教授の中井均先生には基調講演として「岡山県の中世城館跡について（事前録画）」をお話しいただきました。

稲田先生は、総合調査の成果を活かして、今後山城の保護と活用に繋げていくことが重要と話されました。中井先生は、岡山県に石垣・石積みが築かれた山城が多く存在し、竪堀や土塁などの発達した防御施設が見られることから、「当時の最先端技術を採用」していたと評価されました。また、「調査成果から見た岡山の中世城館跡」として、実際に現地調査に携わった調査員３名が、備前国、備中国、美作国に存在する山城の構造や特徴を紹介しました。

新型コロナウイルス感染症対策として会場の定員を半数に減らして開催しましたが、133名の参加者は、熱心にふるさとの山城の話に聞き入っていました。（小林利晴）


稲田孝司先生の趣旨説明



備前国の中世城館の説明

子ども体験教室「塩をつくろう」

８月22日（土曜日）、小学５・６年生を対象にした『子ども体験教室「塩をつくろう」』を古代吉備文化財センターにおいて開催しました。５組10名の親子が参加し、火を起こして海水を煮詰める古代の塩づくりを体験しました。吉備の塩作りの歴史について学んだあと、まずは火起こしに挑戦です。木の棒を板の上で回転させて火種をつくるのですが、皆さんはずいぶんと苦労をしたようで、火種ができた組からは歓声があがっていました。その後は海水（塩分濃度18％に濃縮したもの）を入れた鍋を火にかけ、水分が蒸発するまで煮詰めると塩のできあがりです。水分がなくなる間際、みるみるうちに塩の結晶が表われる様子に驚く子どももいました。また、これにあわせて弥生～古墳時代に使われた製塩土器の見学を行いました。この体験が、塩や古代の暮らしについて知る機会になったことと思います。（圜　奈歩）


塩づくり体験の様子

津島遺跡やよいまつり

10月24・25日（土・日曜日）、岡山市北区いずみ町の県総合グラウンド内にある津島やよい広場と遺跡＆スポーツミュージアムを会場にして、「津島遺跡やよいまつり」を開催しました。両日ともに秋晴れの良い季候に恵まれ、900名を超える参加者がありました。

今年は、勾玉づくりや火起こし体験の人数を制限するなどの新型コロナウイルス感染症対策を取りながらの開催となりました。このため、幼児～小学校低学年のお子さんも気軽に参加できるようにクイズラリーの内容を刷新しました。クイズの正解者は、景品のカラフルな勾玉形の消しゴムやオリジナル缶バッチを受け取り、喜んでいました。

津島遺跡を身近に感じていただける大切な機会として、これからも工夫していきたいと思います。（圜　奈歩）


火起こし体験の様子

令和2年度企画展2「祈りの考古学」

10月７日（水曜日）から、センター展示室において、令和２年度企画展２『祈りの考古学』を開催しています。昔の人々は、自然の豊かな恵みを求めて、あるいは疫病や災害からまぬがれることを願って祈りを捧げてきました。その心情は、新型コロナウイルス感染症といった病や打ち続く自然災害に悩まされている現代の私達にとって、無縁のものではありません。

五穀豊穣のマツリに用いられた弥生時代の飾られた壺と器台、疫病退散を願った奈良時代の陶馬、都で暮らした高貴な女性を葬った平安時代の火葬墓の出土品など、県内から出土した信仰に関する品々約40点を展示して、そこに込められた願いや祈りを紹介しています。

期間は令和３年４月18日（日曜日）までとなっていますので、ぜひご来館ください。（圜　奈歩）


展示の様子

おかやまの遺跡を掘る vol.10

— 南溝手遺跡（総社市）—

◆吉備最古の玉作り

南溝手遺跡は、総社市街地北東の平野部に立地する、縄文時代から近世に至る複合遺跡です。岡山県立大学の建設に伴い、平成２年10月から平成５年３月にかけて発掘調査を実施し、弥生時代最古段階のムラが見つかるなど、多くの成果を挙げています。また、縄文時代に遡る米作りの痕跡や朝鮮半島系の丹塗磨研土器及び孔列文土器など、縄文時代から弥生時代へ移り変わる頃の吉備を知る手がかりとなる資料も出土しました。

とりわけ注目されるのが弥生時代前期の玉作り工房の発見です。弥生時代の管玉は稲作とともに大陸から伝えられたもので、初期の段階では、材料となる緑色凝灰岩や碧玉を産する日本海沿岸で製作された管玉が周辺に流通していたと考えられていました。それゆえ、調査当時、弥生時代最古に位置付けられていた鳥取県長瀬高浜遺跡と並ぶ古い時期の製作跡が吉備の地で見つかったことは驚きでした。鑑定の結果、南溝手遺跡の玉の材料は山陰産の可能性が高く、作り方や使用する道具にも山陰と共通する要素が認められています。

一方、玉を製作していた竪穴住居は、床面中央に、両端に小さい穴が付随する深い土坑を伴っていました。このような構造を有する竪穴住居は、韓国忠清南道の松菊里遺跡で多く見つかったことから松菊里型住居と呼ばれ、朝鮮半島との交流を示す指標の一つとされています。

南溝手遺跡の玉作りは、どこから、どのような経緯を経てもたらされたのか、未だ解けない謎です。

（渡邉恵里子）



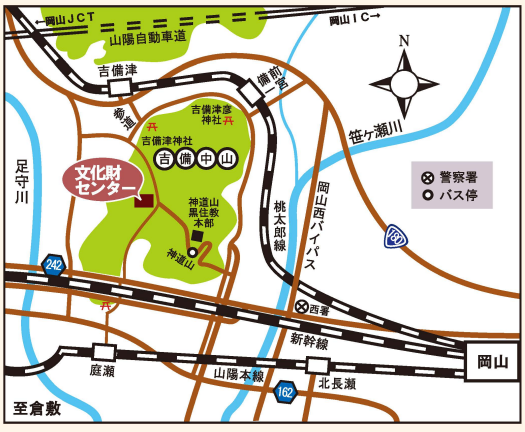
南溝手遺跡全景（南東から）



玉を製作していた竪穴住居（南から）



出土した玉の未製品



ひろげよう あふれる笑顔と 思いやり

編集・発行

岡山県古代吉備文化財センター

所在地　〒701-0136　岡山市北区西花尻1325-3
TEL（086）293-3211　FAX（086）293-0142
https://www.pref.okayama.jp/site/kodai/
https://www.facebook.com/okayama.pref.kodai

◎ 交通案内　JR山陽本線庭瀬駅下車徒歩40分
JR桃太郎線吉備津駅下車徒歩25分
◎ 業務時間　AM8:30～PM5:15
◎ 休業日　土・日曜日及び祝日、年末・年始
◎ 展示室の開館　AM9:00～PM5:00
年末・年始を除き、土・日・祝日も開館しています。
ただし、臨時に休館することがあります。

VEGETABLE OIL INK